



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	比較削除によらない節型比較文について(publisher's vesion)
Author(s)	八木, 孝夫
Citation	英學論考(36): 25-32
Issue Date	2007-11-20
URL	http://hdl.handle.net/2309/90987
Publisher	
Rights	

比較削除によらない節型比較文について

八木孝夫

1. 序: 英語の比較文の分類

少なくとも記述的な観点からは、英語の比較文は、*than/as* X の X の部分の性質に応じて、節型(Clausal)比較文と句型(Phrasal)比較文に2大別できる。節型比較文は、X が文または文の縮約形で、X 内で比較削除(Comparative Deletion)の操作が義務的に適用されたものと見なされている。一方、句型比較文は、X が名詞句や形容詞句など、文より小さい種類の構成素で、比較削除の適用を受けずに出てくる比較文である。(Bresnan(1973), Pinkham(1982), 八木(1987, 2004)等参照。)

節型比較文は、義務的な比較削除の適用を受けただけの文(1)と、X の部分が更に様々な縮約操作を受けたものに分けることができる。縮約の代表的な手段は、比較省略(Comparative Ellipsis)(2a)、擬似空所化(Pseudo-gapping)(2b)、動詞句削除(VP Deletion)(2c)である。¹

- (1) John looks older than he is ____.
- (2) a. If the clothing is wet the heat is lost more rapidly than ____ when it is dry, because water is such a good conductor of heat. (G)
- b. I assured him that he was more likely to need me in the future than I would ____ him! (G)
- c. It doesn't bother me as much as it once did ____.

句型比較文は、(3)のような文で、X 内で比較削除の適用を受けず、言わばそのままの形で出てくる比較文である。(4)のような文は、句型比較文とも、節型比較文で比較省略の適用を受けた文とも見なせるが、この点は本論に関係しないので立ち入らない。

- (3) a. John is older *than forty years*.
- b. Many more men *than women* are willing to accept such jobs, even when women are paid more. (G)
- (4) Jane is older *than Sue*.

理論的な分析という点から言えば、比較文に関して定説と言えだけの分析はまだない。しかし、記述的な観点からの整理という点では、Bresnan(1973)、Pinkham(1982)の分析に基づいた上述の分類が非常に有用で、最も広く受け入れられていると言って良いであろう。本稿の目的は、この分類から漏れる英語の比較文が存在すること、すなわち、形の上では、*than* X の X が文を成す節型比較文でありながら、比較削除が適用されたとは見なせない比較文が存在するこ

とを示すことにある。

2. 比較節内の空所の性質

従来論じられてきた節型比較文の最も顕著な特徴は、縮約操作を受けた場合を除けば、表面上、than/as 節内に、比較削除に由来する空所(gap)が存在することである。

(5) There's more evidence now than there was ___ before. (G)

この空所は、主節の more/-er 句と対応関係があり、意味上、(5)は元々(6)の形をしていて、[[x much] evidence]]が主節の[more evidence]との間の同一性条件を満たすことにより比較削除の操作で消されたと見なすことができる。([more evidence]は、より詳しくは、例えば[[er much] evidence]などと分析できるが、ここでは立ち入る必要がない。)

(6) There is [more evidence] now than there was [[x much] evidence]] before.

さて、ここで次の文を見てみよう。

(7) It's wood and is heavier than I can lift! (G)

原文では“it”は彫刻作品を指す。意図されている意味は、「その彫刻は木製で、重過ぎて自分には持ち上げられない」ということである。(7)の than 節内で“lift”は明らかに他動詞として用いられているので、その目的語の位置は空所である。例文として論じ易いように、(7)の代わりに(8)を用いることにしよう。

(8) The sculpture is heavier than I can lift ___.

(8)は一見したところ、普通の節型比較文とそっくりである。than X の X は文であり、且つ X は空所を含んでいる。しかし、普通の節型比較文であれば、(8)の than 節の空所は、主節の heavier に対応し、範疇的には形容詞句 AP のはずである。しかし、言うまでもなく他動詞 lift の補部は名詞句でなければならず、(9)は、統語的にも意味的にも、(8)の基底形としては正しくない。

(9) *The sculpture is [heavier] than I can lift [x heavy].

比較削除により出てくる普通の節型比較文は、基底形に程度変項 x を含んでいるが、問題の比較文はそれを含まないことが特徴であると言える。² 従って、もし(8)のような文が英語の文法的な文として認められるのであれば、本稿の標題にあるように、英語には比較削除によらない節型比較文が存在することになる。

前段の結論を、なるべく多くの且つ多様な例文で実証することが本稿の目的である。(8)のような文をより理論的な観点からどう分析すべきかということの本格的な議論は、別の場所に譲ることにするが、(8)の空所の性質について、以下の議論の便宜のためにも一応の仮説を立てておきたい。

(8)は意味的には too ... to 構文の(10)に極めて近い。

(10) The sculpture is too heavy for me to lift ___.

従って、(8)における空所は、(10)の空所と同様に、主節の主語と同一指示の関係にあると見な

すのが最も自然であろう(11)。³ 以下、本稿では、ひとまずその立場をとることとする。⁴

(11) [The sculpture] is heavier than I can lift [___].

3. 証拠となるデータの性質

本稿で用いる例文は、ほぼ全て、Google 検索により Web 上から収集したものである。検索対象ドメインとしては com、対象言語としては英語を指定した。引用した例文については、検索結果を見るだけでなく、元の WEB ページに飛んで、該当箇所の前後の文脈を確かめた。また、常識的な範囲で推察できる限りにおいて、その文の筆者が英語の母語話者と思われるものだけを引用している。なお、as ... as 型の比較文については未調査なので、以下の事例は全て than 型比較文である。

WEB からの例文であることから、信頼性を疑問視する向きもあるかもしれない。書いた人が母語話者とは限らない、注意深く書かれたものかそれとも文法的な細部に頓着せず書き流されたものか分からない、などの問題は確かに存在する。しかし、データ収集に関してどのような手法を用いようとも、究極的に、文法性を「証明」することはできないという点では変わりがない。母語話者に尋ねたり、Brown Corpus のような綿密に設計されたコーパスから例文を取って来れば、それで即その文が文法的ということが保証されるわけではない。ある特徴を持った文が一般的に文法的であるという主張は、どのようなソースから収集した例文に基づくこととも、厳密に言えばあくまでも仮説である。

結局、我々がすべきことは、様々な手法により、文法的であることの確からしさを増す努力をすることであり、そして、その点に関して言えば、WEB からの例文に基づいた主張であっても、その信頼性を高めることは十分に可能である。前節に述べた特徴を持った比較文が、非常に多くの WEB site から見つかる場合、当該の比較構文が多くの英語話者にとって—そして、可能性としては、英語話者一般にとって—文法的であるという結論は、十分に強い裏づけを持つと言って良いであろう。なぜなら、それらの site の文章を書いた人が全て非母語話者であるとか、当該の例文がどれも非文法的であるということは、常識的に考えてあり得ないことだからである。さらに、比較節内の動詞の種類や構文に、色々な変異があれば、当該の構文がごく一部の固定的な表現に限られたものではなく、一般性のある規則に支えられたものであることがよりはっきりするであろう。本稿では、以上の観点から、紙幅の許す範囲で、なるべく多くの事例を示すことにする。

さて、WEB 上の文章でも、もちろん、教養ある人が注意深く書いたと判断できる文章は無数に存在する。また、出版物の文章は一般に文法性に関する信頼性がより高いと見なされているが、文学作品や雑誌の記事などで、WEB 上で公開されているものも大量に存在する。問題の比較文についても、その種のソースからの例文が存在することを確認しておくのは、文法性に関する疑念をぬぐう上で大いに役立つであろう。幾つかその種の例を見ておくことにする。

(12)は、Pittsburgh 大学の教授による学術的な文章の一節である。(13)に抜き出したのが問題の比較文である。

(12) Research programs are typically terminated under one of two circumstances: Either problems accumulate more rapidly *than can be solved*, leading to a Kuhnian "crisis" in the research program, or other problems associated with other research programs appear more attractive to the new generation of scientists. (G)

(Steve Fuller "Can Science Studies Be Spoken in a Civil Tongue?" <www.totes.com/en/technology/science_technology/fuller.html>)

(13) Problems accumulate more rapidly than ___ can be solved.

空所の位置に副詞句の[x rapidly]を想定することは、統語的にも意味的にも明らかに不可なので、(13)は、比較削除による比較文ではない。なお、比較節内が受身文であることにも注意したい(類例(16)(33)(38))。

(14)は、少し古いが、作家 Kipling(1865-1936)の *The Day's Work* (1898) Part I からの引用である。(全文は、Project Gutenberg で入手可能。) 問題の比較文の意味は(15)で表すことができる。

(14) "That's more metaphysical *than I can follow*," said Miss Frazier, laughing. (G)

(15) That's too metaphysical for me to follow ___.

(14)において、follow の補部として[x metaphysical]を想定することは明らかに不可である。

次も少し古いが、雑誌 *Time* の 1929 年 8 月 12 日号からの例である。記事の内容によると、この文の書き手は Hoover 大統領である。

(16) I fear you have been misinformed as to the actual problems that lie before us, for they are far more intricate and difficult *than can be solved* by the simple formula which you suggest. (G)

(<http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,732731,00.html>)

以上の3例だけからでも、問題の比較構文が英文法上無視できない地位を持つことは明らかであろう。なお、(14)や(16)は、この構文が歴史上いつ頃から使われ出したのかという点からも興味を誘う例である((34)も参照)。

4. 比較節内における比較削除の適用の有無について

ある節型比較文が、本稿で問題としている種類の比較文かどうかを判断するためには、比較節内で比較削除を受けているかどうかを見極めねばならない。これは必ずしも容易なことではない。特に、以下に述べるように、比較省略との関わりが注意を要する。

次の文について考えてみよう。(便宜上、以下では(18)を使用する。)

(17) As this issue is more complex than I can deal with adequately here, ... (G)

(18) The issue is more complex than I can deal with ___.

(18)は実質的に(19)と同意と考えられる。

(19) The issue is too complex for me to deal with ____.

従って、一見したところ、(18)は、他動詞の補部が空所になっている(8)や(14)と同類で、比較削除によらない比較文の一例のように見えよう。しかし、先の事例と異なり、空所の前の動詞が deal with であることが事態を複雑にしている。deal with は、その補部として、主語-述部関係を表す要素から成るいわゆる小節 (small clause) の一種をとることができる。

(20) I asked her how she can deal with *him being gone so much*. (G)

従って、(18)の基底の構造として、程度変項を含む普通の節型比較文としての構造(21)を想定することも可能である。

(21) The issue is more complex than I can deal with [it being [x complicated]].

(21)の表す意味は、その問題が X という程度の複雑さであれば扱うことができるが、実際の複雑さは、その X という程度を超えている、ということであると理解できる。すると、実質的には、too...to 構文の(19)のように解釈した場合と差がないことになり、意味の面から(21)の可能性を排除することはできないことになる。

もし(21)の構造を採った場合、(18)に至るためには、with 以下の小節を消す必要がある。比較削除と比較省略によって、例えば(22)から think の補文を削除して(23)を導くことができると同様に、主節との同一性条件の下で、(21)において with の補部の小節を削除することができるかどうかの問題となる。もしそれができるのであれば、(18)は、本稿で問題とする構文の例とは限らないことになる。

(22) Getting rich is simpler than you think [it is [x simple]].

(23) Getting rich is simpler than you think ____.

この点に関し決定的な証拠となるのは次のような文である。(Gary(1979)が(24)を挙げている文脈は、ここでの問題とは無関係である。)

(24) She's prettier than the part calls for. (Gary (1979: 139))

(24)は、「彼女はその役柄が要求する以上に美人だ、つまり、きれい過ぎて、その役には向いていない」という意味に解釈できる。(25)に示したように call for も小節をとることができるので、(24)の基底形として、(21)と同様の構造の(26)(または(27))を想定することができる。

(25) But you may recall, I called for *him being fired* a year ago. (G)

(26) She's prettier than the part calls for [her being [x pretty]]

(27) She's prettier than the part calls for [her to be [x pretty]]

(26/27)の意味は、「その役柄は彼女が X という程度に美しいことを要求するが、彼女の美しさはその X という程度を超えている」ということである。この意味は、call for されるものの内容を的確に表していて、(24)の意味として正に適切である。一方、当該の意味は、too...to 型比較文の(28)の構造では表せないことは明らかであろう。

(28) She is prettier than the part calls for ____.

従って、(26/27)から比較省略によって(24)を導くことが可能でなければならないことになる。このことは、同様に(21)から(18)を導くことも可能であることを意味する。

結論として、(18)のような文は、本稿で問題としている比較構文の例ともとれるが、普通の節型比較文が比較省略を受けた例ととることもできるので、⁵ 前者の証拠として挙げるのは適当ではないことになる。次節では、意味的または統語的観点から、比較削除+比較省略による派生の可能性がまずないと考えられる例のみを挙げることにする。

5. 実例と今後の課題

以下、紙幅が許す限りで、比較削除によらない節型比較文の実例を挙げる。例文の多様性に関して、ここでは主に、比較節内の動詞について配慮した。主節の *more-er* 句の語彙や文法機能、文全体や比較節の構文の種類などについても多様性を確認することが望ましいが、それは別の機会に譲らねばならない。

- (29) Make sure it's much bigger *than* he could *swallow* ____ . They have to eat around the rock and that slows them down. (G, 以下同様) [“it”は、犬が余りに急いで食べるのを防ぐため皿に入れる石。]
- (30) Those jeans are about 2 sizes bigger *than* I can *get into* ____ right now, ...
- (31) This book was a little longer *than* I could *read* ____ at one sitting, but ...
- (32) After working on the story for a little while, it occurred to me that this story – even as a short one – will be a lot longer *than* I can *finish* ____ in its entirety before Sunday.
- (33) Therefore the system can be neither larger nor heavier *than* ____ can be easily *carried* by one person.
- (34) ... or else my burden will be heavier *than* I can *carry* ____ . (E. P. Roe, *A Face Illumined* (1878), テキストは Project Gutenberg にて入手可能。)
- (35) The value of your campaign may be greater *than* you can *measure* ____ .
- (36) ... simply because the issues are more complex *than* you can *reduce* ____ down to a sound bite, ...
- (37) Every sentence I thought of (and probably half the ones I did write) was more complex *than* I could remember how to *compose* ____ .
- (38) What I will say is that the infection control problem is more complex *than* ____ can be *solved* by common sense alone.

前節までで見た問題の構文の例と同様に、以上の例ではいずれも、比較節内に *can/could* が現れている。このことは、検索文字列に *can/could* を含めて検索することが多かったことの直接的な反映である。そして、含めた理由はもちろん、*too ... to* 構文との意味的類似性を考えると、“heavier than I can” のような指定の仕方をすれば、求める例文が見つかり易いと考えたか

らである。比較節内に can/could を含まない(39)や(40)も問題の構文の例と考えて良いと思われるので、比較節内に can/could が必要という条件はないことになる。

(39) ..., that phrase being some sort of Buddhist mantra whose full meaning is a bit more complex than I care to try and decipher _____. (G)

(40) the last problem you gave me is a little bit longer than I have time for _____ at the moment ... (G)

too ... to 構文との共通性では恐らく、「非現実」あるいは「未然」という、「可能性」よりももう少し抽象的なレベルの意味要素に着目すべきかも知れない。⁶ 比較節の法性や時制は、この構文の性質を探る上で極めて重要であり、この点は稿を改めて論じたい。

注

1. 以下、例文の後の“(G)”は、Google 検索による WEB からの例であることを示す。例文中の斜体及び空所を表す下線は全て筆者による。また、正書法に合うよう実例(30)中の一部の小文字を大文字に直した。
2. この区別の述べ方は、本稿で記述の枠組みとして用いている Bresnan(1973)、Pinkham(1982)の分析を前提としている。もう少し理論に中立的で抽象的な言い方をすれば、普通の節型比較文では、派生のいずれかの段階の構造において比較節内に主節の more/-er 句に対応する要素が何らかの形で存在するが、(8)のような文にはそれがない、ということになる。

(8)のような文では、比較節の解釈に必要な程度変項は独自の意味解釈規則によって導入されねばならない。このことは、統語構造と意味構造(概念構造)を結ぶ規則の多様性と重要性に対する新たな一例証であると言える。この点に関する最近の根本的な考察としては、Culicover and Jackendoff(2005: Ch.1)を参照。

3. 実際には、単純に「同一指示の関係」と呼ぶのには問題がある。(i)のように、主節の主語には、非指示的な表現も生じ得るからである。

(i) No problem is too difficult for me to solve _____.

問題の関係をより厳密に述べるためには、数量詞による束縛変項が表示された構造に言及せねばならないが、本稿の主題にとっては重要でないのでここでは立ち入らない。

4. 理論的な観点からは—特に、動的理論(Kajita(1997, 2002))の観点からは—問題の比較構文が too...to 構文の影響で派生的に生じたという可能性も十分考慮に値しよう。この点、WEB 上で、too ... than の共起例が散見されるのは大変興味深い。

(i) Often we find ourselves hanging on too long than we should because of a great deal of emotional attachment that doesn't allow us progress forward. (G)

5. 命題を表す構成素を補部とする述語は数多く存在するので、(18)と同様の例は少なくないと考えられる。(18)のように二重の分析の可能性を許す文の存在は、問題の構文の発生の上で重要かも知れない。

6. 少数ながら、比較削除によらないことが明らかな節型比較文で、too ... to 構文的な解釈ができないも

のが散見される。

- (i) I'm actually rather proud of this original design, because it's more complex *than I usually have the patience to put ___ together.* (G)

もしこのような文が文法的であれば、比較削除によらない節型比較文に複数の種類を認める必要があるかも知れない。あるいは、too... to 構文との類似性という見方を捨てて、より広い意味解釈の仕方で総括的に扱う行き方も考えられる(例えば自由関係節としての解釈)。この点は、今後の重要な研究課題の一つである。

引用文献

- Bresnan, J. (1973) "Syntax of the Comparative Clause Construction in English," *Linguistic Inquiry* 4.3, 275-343.
- Culicover, P. W. and R. Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford U. P.
- Kajita, M. (1997) "Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language," in M. Ukaji et al. eds. (1997) *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, Taishukan., 378-93.
- Kajita, M. (2002) "A Dynamic Approach to Linguistic Variations," *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, ed. by Y. Kato, 161-8, Sophia University.
- Pinkham, J. (1982) *The Formation of Comparative Clauses in French and English*, Ph.D. diss., Harvard University.
- Gary, E. N. (1979) *Extent in English*, Ph.D. diss., University of California.
- 八木孝夫 (1987) 『程度表現と比較構造』(新英文法選書 第7巻) 大修館書店。
- 八木孝夫 (2004) 「英語の比較表現」(特集「比べる」)『月刊言語』第33巻10号, 40-47, 大修館書店。